

生育促進資材によるツマジロクサヨトウの被害抑制効果について (第2報)

○山田大輝、寺井智子

愛媛県畜産研究センター

【目的】飼料用トウモロコシでの被害が拡大しているツマジロクサヨトウについて、前報では省力的な防除技術の開発として、アミノ酸液肥や薬剤とアミノ酸液肥の併用による1回施用の被害抑制効果を調査したところ、薬剤とアミノ酸液肥の併用が収量低下の抑制に有効であることが示唆された。今年度は、薬剤を飼料用トウモロコシに登録のあるものを用い、より実用に則した形で省力的な防除技術の被害抑制効果を検討した。

【方法】供試品種はゴールドデント KD731 (RM123、8月2日播種)を用いた。薬剤を2回施用する区を対照区、1回目のみ施用するものを試験区として、薬剤を用いる薬剤区、アミノ酸液肥を用いるアミノ酸区および薬剤とアミノ酸液肥を用いる併用区の3区を設定した。また、防除を行わない無防除区も設定し、各区3反復とした。調査項目は被害程度と収量性とした。被害程度は茎葉および子実について5段階(1(無)～5(甚大))にスコアリングし、茎葉は生育初期、中期、収穫期の3回、子実は収穫期に調査した。収量性は乾物収量とTDN収量を調査した。なお、施用は1回目1～2葉期、2回目3～4葉期の予定であったが、降雨により1回目3～4葉期、2回目7～8葉期での実施となった。

【結果】茎葉の被害程度は、生育初期には全区1.5程度であったが、収穫期には無防除区およびアミノ酸区で2.0前後と小程度の被害の拡大がみられた。一方、対照区、薬剤区および併用区では被害の拡大はみられなかった。子実被害は全区1.5程度であった。

収量性について、TDN収量は各区间で有意差は認められなかったものの、対照区で1,250kg/10aに対し、無防除区1,187kg、アミノ酸区1,184kgと減収傾向となった。一方、薬剤区1,271kg、併用区1,221kgは対照区と同等の収量であった。

【結論】以上の結果より、施用開始が3～4葉期以降のアミノ酸液肥においては、単体、併用ともに施用効果は確認できなかった。また、薬剤は生育初期期間中の複数回施用が有効とされているが、今回は対照区の2回目施用が生育中期となり、複数回施用の効果がみられなかったと考えられる。なお、今後は、生育初期(1回目1～2葉期、2回目3～4葉期)における薬剤および薬剤とアミノ酸液肥の単回併用施用の効果について引き続き検討する。

畜種：牛、分類：畜産技術、キーワード：飼料用トウモロコシ、飼料害虫